

氣の毒やおれを暮うて来る胡蝶
枕する腕に蝶々の寝たりけり
賓都留の御島を撫でる胡蝶かな
大笠にふせられはぐる胡蝶かな
わがあまにつき損じてやかへる蝶
來る蝶に鼻をあかする垣根かな

蛙戦ひといふを見にまか
る四月二十日なりけり

瘦せ蛙負けるな一茶こゝにあり

古戰場真間の井

散る花をはつたみ睨む蛙かな
五百崎や龜の子笠に鳴く蛙
五百崎や庇の上に鳴く蛙
落の葉に喜んでひつくり蛙かな
江戸川に蛙も鳴くやさし出に
象潟や櫻をたべて鳴く蛙

あなう世を知らでや蛇の穴を出る
めでたさの烟簞えて鳴く蛙
向々に蛙のいこはまこかな
親分さ見わて上座になく蛙
我を見て苦い顔する蛙かな
榎まで春めかせり鳴く蛙
悠然として山を見る蛙かな
玉川や先お先へまごぶ蛙
おれこして睨みくらする蛙かな
草陰につんこして居る蛙かな
鳴き出して五分でも引かぬ蛙かな
一つ星見つけたやうになく蛙
小高みに音頭まりの蛙かな

蠶

末の子も別にねだりて蠶かな
様づけに育てられたる蠶かな
皆々に機嫌こらるゝ蠶かな

蜂

蠶醫者く流行る娘かな
屎蟲や蜂もなつても嫌はるゝ
熊蜂も軒を知つては歸りけり

虻

それ虻に世話を焼かすな明り窓
神風や虻がをしへる山の道

蛇

飛蛇にまかせて行けば野茶屋かな
蛇一つ晝寢起してまはるなり

櫻

吾朝は草も櫻を咲きにけり

萱

今すこしもたしなくもがなすみれ草
淺茅生や重しめりの薄草履

木の芽

山里や猫も木の芽もほけいでぬ

五加木

西行にお宿申さむ五加木飯

春 草

石疊つぎ目くや草青む
若草や北野まるりの小供講

門の草生え初めからうこまるゝ
一はなに憎まれ草の青むなり

門先や猫のねる程草青む

芽出しから人刺す草はなかりけり

長谷の山中に籠りて

我も今朝清僧の部なり梅の花

櫻

はつせ

貫之の梅につけたり三日の月

梅に竹箒餐

梅が香にいざ掃除せん鳥の留守

何事もなきこそ目出度けれ

家内安全に咲きけり梅の花

天神 參

ちさい子の麻上下や梅の花

園十郎

咲いたかな江戸生えぬきの梅の花

院濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花

柏馬覽古

梅が香や平親王のおん月夜

山鶯よりも珍らしく

新金を商にあてけるを

二分判の初音出しけり梅の花

古之爲關也將以禦暴

今之爲關也將以爲暴

關守の灸點流行る梅の花

紅 櫻

紅梅やそつこ吐れば二本まで

鶯も親子つこめや梅の花

梅さくや泥卓鞋にて小盃

この壁に無駄書無用梅の花

泉水の井戸の際より梅の花

一入の新善光寺ぞ梅の花

ひりくゝみつむりに溢る梅の花

風呂敷をかぶつて見たり梅の花

梅さくや老のあたまに溢みる程

大淀や大曙の梅の花

朝聲や子の曰く梅の花

梅咲くや江戸見て來たる子供容

我春も上々吉ぞ梅の花

あながちに丸うなうても梅の月

子供までのんめうこよぶ梅の花

梅の木や欲にや願はぬ三日の月

梅咲や鍵を喰はへし御狐

樂々こ梅ものびたる田舎かな

庵の梅よんきころなく咲きにけり
 米搗や臼に腰かけて梅の花
 梅が香や御酒を供ふる御制札
 人のするほうほけけうも梅の花
 小坊主や筆を喰はへて梅の花
 梅折るや盗みまするこ大聲に
 缺茶碗開帳したり梅の花
 梅の木のある顔もせぬ山家かな
 男禁制の門なり梅の花
 餅組も一座敷なり梅の花
 簀尻に賽錢箱や梅の花
 鳥の音に咲ふこもせず簀の梅
 そら錠三人には告げよ梅の花
 梅に月いや味から味はなかりけり
 梅の花こゝを盗めこさす月か

菜の花

菰はけば早あか／＼こ梅の花
 下戸村やしんかんこして梅の花
 梅折るや天窓のまるい影法師
 笠きるや梅のさく日を吉日こ
 梅咲くや唐土の鳥も来ぬ先に
 月の梅酔の蒟蒻のこ今日も過ぬ
 菜の花や霞の裾に少しづつ、
 かるた程門の菜の花咲きにけり
 大菜小菜喰う側から花さきぬ
 草の戸の春は来にけり露の臺
 片陰に棒のやうなる蕨かな
 庚申の足の下から蕨かな

葛若葉

乳母の心

椿

十圍子葛の若葉につゝむべし
 鎌倉や普さなたの千代椿

藤の花

千貫戸樋にて

高戸樋や撃してゆく藤の花

春の日の入りきころなり藤の花

つゝじ

百兩の石につり合うつゝじかな

山吹

山吹をさし出しそなた垣根かな

苗代

川は又山吹さきぬ芳野川

苗代

苗代は庵の筋に青みけり

種まき

苗代のむら亘りけり夜の雨

種まき

早淋し朝顔蒔き云ふ島

種まき

我蒔た種をやれ〜けさの霜

種まき

大和めぐりする人に旅の

種まき

眞言といふを授けて

種まき

必づよあこ見よそわか花の雲

種まき

吹く風の土に宿れる境界

種まき

と今朝人並に祝うて

種まき

塵の身のふはり〜花の春

種まき

北國へ逆旅せんとて

櫻さく世をふん切て小菅笠

大津晝鬼の酒のみ

三味ひく晝に

あたら身を佛になすな花に酒

大黒の櫻を見る園に

散る花に

いかな放さぬ頭巾かな

念佛踊

花さくや三味線にのるお念佛

人問

咲花の中にうごめく衆生かな

修羅

色々に花の木蔭のぼくちかな

音生

散る花に佛ミ法も知らぬかな

餓鬼

花散るや飯みたき水を遠霞

御所にて

棒突が肥でをしへる櫻かな

新吉原二句

うゑ櫻花も苦界はのがれざる

行燈ではやし立てるや花の雲

刈萱堂

花の世は地藏菩薩も親子かな

三月十七日

花散るやこある木蔭も小開帳

角田堤

散る花や花の威を借る都人

牡丹餅やあこの祭に散る櫻

小坊主や親の供して山櫻

ちる花を脇になしてや江戸櫻

花咲くや京の美人の頬冠

櫻

崇りなす杉は太りて散る櫻

古櫻花のさくこてさきにけり

里人の花の威を借る櫻かな

かう活きて居るも不思議ぞ花の陰

白雲にお花の種を蒔かばやな

花の蔭南無三火打なかりけり

花ちるや稱名うなる寺の犬

花を折る拍子にこれししやくりかな

花の木に鶏ねるや淺草寺

花の蔭あかの他人はなかりけり

衰や花を折るにも口曲る

山の月花盗人を照らし玉ふ

人撰して一人なり花の蔭

只たのめ花もはらくあの通り

さる人は病氣を遣う花見かな

花の木のもつて生れた果報かな
苦の娑婆や櫻が開けば開くまで
有やうは我も花より圓子かな
今の世や猫も杓子も花見笠
櫻へみ見えてじんくはしよりかな
煤臭き笠も櫻のふる目かな
一本は櫻持ちけり娑婆の役
此のやうな末世を櫻だらけかな
下々に生れて夜も櫻かな
人聲はほつこしたやら夕櫻
一夜さに櫻はさゝらほさらかな
氣に入つた櫻の蔭もなかりけり
櫻々こうたはれし老木かな
花守や夜は汝が八重櫻
天からも降つたるやうに櫻かな

袖だけの初花櫻咲きにけり
山櫻皮をむかれて咲きにけり
傘へべつたりみつしし櫻かな
天邪鬼踏まれながら櫻かな
君が代の大飯食うて櫻かな
若衆に先こされじよ花の蔭
開帳の目あてにさきし櫻かな
遠山の花に明るし東窓
先くりに花さく山や一日づゝ
花散るや末代無智の凡夫衆
なまけるや翌も月あり花ありこ
夜櫻や天の音楽きし人
うつるこも櫻の風ぞ花の蔭
江戸櫻花も錢だけ光るなり
髪髭の白い仲間や花の蔭

夜櫻や美人天から下るこも
提灯の花の雲間へ入にけり
小むしろや花くたびれのきたくね
慾垢のほんのくほへも櫻かな
石佛風除にして櫻かな
花咲くや下手念佛も錢が降る
鬼のすむ沙汰もなくなる櫻かな
古垣の花も三月十日かな
草庵に來てはくつろぐ櫻かな
遠近の花にあかるし後窓
賽錢にあをり押さるゝ櫻かな
こちこらは花は咲かうがさくまいが
善の網惡の櫻のさきにけり
三吉野や寢起も花の雲の上
花さくや目につかはれて大和迄

花さくや日傘の蔭の野酒盛
茶屋村の一夜に湧きし櫻かな
中々に持たぬがましよ散る櫻
花の世に親やしなふ鴉かな
小むしろや錢三胡蝶三散る櫻
人々や笠着て花の雲に入る
神風や魔所もやはらぐ山櫻
花は雲人は煙こなりにけり
櫻の花見にも義理なり京住居
花の世に西の望はなかりけり
三尺に足らぬも花の櫻かな
花の世や出家侍諸商人
餧汁や櫻が下のあけごころ
十人の目利はづれて花の雨
花盛浮世の外はかはらずに

目の毒も知らぬ中こそ櫻かな
散る花は鬼の目にさへ泪かな
度々の花に荒れゆく疊かな

鳥原

入口のあいそに靡く柳かな

善光寺堂前

柳

灰猫のやうな柳もお花かな
人聲にもまれて青む柳かな
門柳天窓でわけて這入りけり
犬の子の踏まへてねむる柳かな
通ぬけせよ垣から柳かな
皮剥が腰掛柳青みけり
乞食の佛壇見ゆる柳かな
けろりくわんこし鴉ミ柳かな
雨あがり朝飯過の柳かな

野雲隠のうしろを圍う柳かな
下總へ一筋かゝる柳かな
一吹にほんの柳となりにけり
柳からももんぐわあと出る柳かな
青柳に金平娘立ちにけり
馬の子の柳くゞりをしたりけり
おそろしき柳となりて寛かな
たつた今突きさしたれき柳かな
散りこむや柳が絮もねまる程

— (春終り) —

夏

清水

夜に入れば精出して湧く清水かな

人の世の錢にされけり苦清水

山里は米をつかせる清水かな

南無大慈大悲々々の清水かな

山番の爺が祈りし清水かな

山清水人の往來に濁りけり

此入はさなたの庵ぞ苦清水

わる赤い花のこてく苦清水

清水見てから大門の長さかな

笹つたふ音ばかりでも清水かな

山里は馬にかけるも清水かな

戸隠山

据風呂に流しこんだる清水かな

小金原

母馬が番して飯ます清水かな

夏山やまごを目當に喚子鳥

夏山やひまり機嫌の女郎花

小むしろや茶釜の中の夏の月

打水に宿り玉ふぞ夏の月

なぐさみに薬をうつなり夏の月

佐保姫の御子も出玉へ夏の月

寝せつけし子の洗濯や夏の月

戸口から難波瀉なり夏の月

寝むしろや肱を枕に夏の月

夕立や乞食殿の庭の松

夕立のこり落したる小村かな

今の間に二夕立やあちら村

小むしろやはした夕立これもまた

夕立に晝寢の尻をうたせけり
夕立や咬みつくやうな鬼瓦
夕立や行燈直す小椽先
夕立に鶴龜松竹のそぶりかな
夕立や樹下石上の小役人
夕立の裏を見せたる峠かな
夕立やはらり酒の肴程
夕立や兩國橋の夜の體
夕立や二文花火も夜の體
寢並んで遠夕立の評議かな
言譯に一夕立の通りけり
辛崎や夜も一入夏の雨
向ふから分れて來るや小夕立
あこからも又ござるぞよ小夕立
夕立は天王さまがお好やら

雲

音計りでも夕立の夕かな
兎角してはした夕立ばかりなり
早稻の香や夜さりもみゆる雲の峰
蟻の道雲の峰よりつゞきけり
あの中に鬼やこもらん雲の峰
湖水から出現したり雲の峰
まつりせよ小雲が山をこしらへる
なけだした足のさきなり雲の峰
風あるを以て尊し雲の峰
湖へすり出したり雲の峰
山人の枕の際や雲の峰
寢むしろや足でかぞへる雲の峰
起々の慾目引はる青田かな
夕風や病氣もなくて田の青む
青い田の露を看や一人酒

青田

我心露かこ走る青田かな

そんじよそここ、こ青田の最負かな

稽古笛田は悉く青みけり

寝並びて己が青田をそしるなり

野の宮にかくれたる

歸せ法師を訪ふ

柴の戸や青田の風にやなはれ

炎天に夢喰ふ蟲の機嫌かな

賦園會 月鉾にもつこ聳わよ朝煙

小童がかぶりたがるや筑摩鍋

つくま祭 鉾の兒群集に酔もせざりけり

今一度婆もかぶらんつくま鍋

菖蒲 菖蒲召せ武門かやうに靜なり

小轎のこつそり暮るゝ座敷かな

藪村はこゝにこ立つる轎かな

山風はがつくら落や門轎

田 植

嵯拾山

植のこせせめては月の田一枚

粒々皆辛苦

もたいなや晝寢してきく田植唄

身一つを過ぐすとて田

植唄の暮の哀れさは

おのが里仕舞てきこへ田植笠

妹が子や笠をほしさに田を植る

目出度さやささり〜こ拾早苗

—夏—

今の世や見え半分の田植唄

信濃路や上の上にも田植唄

明神の鴉も祝へ田植飯

唐人よ見よや田植の笛太鼓

たつた今旅から來しを田植馬

落の葉に鱒をくばる田植かな

早苗 道端や馬も喰はれぬ捨早苗

隠家の島にも植わる早苗かな

早乙女 葛飾や早乙女勝の渡舟

早乙女や箸にからまる草の花

早乙女が尻につかへる筑波かな

馬迄も田休すなり門の原

薬日 神國は天から薬降りにつけり

薬降る日々ミてがらつく隠居かな

今日の日以降れく〜難の延べ薬

夏花 夏花摘や扇をちよいこほんのくほ

夕影や駕の小脇の夏花持

夏書 菊島木札もちよいこ夏書かな

納涼 兩國橋上

下見ても方圖がないぞ納涼舟

同 橋下

母親ははるかかかの艦に夕納涼

江戸住人

銭なしは青草も見す夕納涼

人形町

人形に茶を運ばせて納涼かな

越後新潟にて

下駄ころりきやらり彼等の夕納涼

此月に納涼手のない夜なりけり

慰に鋤口ならず納涼かな

—夏—

魚ごもや桶ごも知らで夕納涼
 身の上の鐘ご知りつゝ夕納涼
 藪村の貧乏なれて夕納涼
 門納涼人の朝顔咲きにけり
 まゝつ子や納涼仕事に葉たゝく
 一尺の溜も音して夕すゞみ
 夜に入れば下水の上に納涼かな
 義理のある親子睦し夕納涼
 母親や納涼がてらの針仕事
 こゝろゝめん鶏よぶやゆふ納涼
 有明や二番尿から門納涼
 水に湯にぎの流でもゆふすゞみ
 門納涼夜は煤臭くなかりけり
 線香で貰ふきゝ納涼かな
 いざ往なん江戸は納涼もむづかしき

罪あらず座頭の納涼耳なくば
 煤臭き彌陀ご並びて夕納涼
 さすこでも都の蚊なり夕納涼
 貰の火手にうちぬいて夕納涼
 月さへもそしられ玉ふ夕すゞみ
 鶯に水を浴びせて納涼かな
 夜納涼や大僧正のおさげ口
 大納涼無疵な夜もなかりけり
 穴ばたに片足さけてゆふ納涼
 有明に納涼直すやおれが家
 妻なしが草花さきぬ夕納涼
 一吹の風も身になる納涼かな
 きのはは鮮魚に宴し
 今日松三佛
 夜納涼が笑も納めでありしよや
 俳諧宗雲水に送る

—夏—

鬼茨も添うて見よく、一納涼

川中島に行脚して

芭蕉様の脛を咬つて夕納涼

川狩や地藏の膝の小脇差

川狩のうしろ明りやむら木立

夜に入れば只下るさへ鶴舟かな

鶴の嘴は洩れても同じ鶴川かな

わやく、ミ土産をねだる鶴の子かな

淋しさを鶴に言ひつけて放すなり

手馴鶴の塚に埋むる髻かな

夢の世を鶴ミ語りつゝ語りつゝ

放れ鶴の綱のありとも知らざるや

露の世や露の小脇に鶴飼村

鶴の真似は鶴より巧者な子供かな

ひいき鶴は又もからみで浮びけり

隙

夏座敷

無限愁有限命

この風に不足言ふなり夏座敷

田の人も見ろも耻かし夏座敷

残物のこそ酒盛や夏座敷

松蔭や寝塵一つの夏座敷

よい猫が爪かくすなり夏座敷

—夏—

旅瘦を目出度がるなり夏座敷

井戸

月さすや洗ひぬいたる井戸の底

蚊遣

大雨の敷居にちよいこ蚊遣かな

蚊いぶしも慰になるひこりかな

茶咄のあいそに一寸蚊遣かな

晝寝

今迄は罰もあたらぬ晝寝かな

山水に米をつかせて晝寝かな

人を見てまたく無理に晝寝かな

田の人を心で拜む晝寝かな

算盤に肘をもたせて晝寝かな

人並に晝寝したふりする子かな

蓮の葉に片足のせて晝寝かな

山の木枝おし曲けて晝寝かな

笠をきたなりでごろりこ晝寝かな

一枝の榎がざして晝寝かな

汗

面白う汗の流るゝ浴衣かな

夏瘦

汗の玉草葉に置かばきの位

御歌

我庵は草も夏瘦したりけり

昔からこんな風かよ夕歌

萩もいま色なる波や夕歌

燈籠のやうな花さく御歌かな

水ざぶく雨拵へて御歌かな

蟾殿の這出給ふ御歌かな

ちこの間名所なりけり夕歌

形式をこくふきかへせ萩芒

形代にさらばくをする子かな

麻の葉に借錢書いて流しけり

母の分もひみつづくる茅の輪かな

堂守が茶菓子賣るなり夏木立

法談の手真似も見わて夏木立

村中やちさいおのれが夏木立
大寺は留守の體なり夏木立
芝でした休み處や夏木立
門先やこもし挿しても夏木立
赤い葉の榮耀に散るや夏木立
二番火の酒のさわぎや夏木立
夜駄賃の越後肴や夏木立

木下閣

禪寺

隅々も掃除ミヨクや木下閣
門脇や粟搗く程の木下閣
界限のなまけさころや木下閣
白笠を少しさますや木下閣

五月雨

妙義山

五月雨や夜もかくれぬ山の穴
五月雨や穴のあこ程見る柱

草の葉や馬鹿丁寧の五月雨

五月雨や胸につかへる秩父山

五月雨や花をはじむる小萩原

五月雨の竹にはさまる在所かな

養蠶の運のつよさよ五月雨

一舟は皆草花や五月雨

五月雨も仕舞のばらりくかな

虎が雨なき軽んじてぬれにけり

我庵は虎の泪もぬれにけり

女郎花つんミ立ちたり虎が雨

入梅晴の引のこしけり竹生島

入梅晴や二軒並んで煤拂

幾日まで土用休ぞ夜の雨
白菊のつんミ立ちたる土用かな

六月

六月や月夜見かけて煤拂

戸口から青水無月の月夜かな
六月にろくな月夜もなき夜かな
夏の夜や二軒して見る草の花
短夜や赤い花さく蔓の先

夏の夜
短夜

短夜に木錢がはりのねむりかな
短夜を喜ぶさししになりにけり
短夜に竹の風癖直りけり
短夜や吉原駕の宙をこぶ
露散りて急に短くなる夜かな

涼さ

新家賀

涼さや糊のかはぬ小行燈

春甫京へ行くを送る

涼しからん這入口から京の水

四條川原

涼風に月をも添へて二文かな

奥信濃に浴して

下々も下々下々の下國の涼さよ

裏長屋のつきあたり
に住す

涼風の曲りくねつて來りけり

涼さや笠を帆にして煮賣舟

朝涼や汁の實を釣る背戸の海

拵した露も涼しや門の月

涼風のふく木へ縛る我子かな

涼さやこゝ極樂の這入口

柴垣や涼しき方に方違

涼風に出口もいくつ松柏

涼しさに大福帳を枕かな

棧を知らずに来たり涼さに

くたぶれや涼しい木蔭見て通る

涼風も一升入のふくべかな

涼しさや沈香も焚かず屁もひらず

涼しさは直に神代の木立哉

涼しさや土橋の上の菰盆

涼さや藍よりも濃き門の松

古垣も夜は涼風の出處かな

涼さに一番木戸を通りけり

涼さや彌陀成佛のこの方は

涼さや里生わぬきの夫婦松

涼風もこなりの竹のあまりかな

涼さや夜水のかゝる井戸の音

人の香の更けて涼しや都鳥

涼さの下黙いたゞくやするかん寺

火宅でも持てば涼しき寝起かな

草半今こしらへし涼風ぞ

碓氷峠にて

信濃路の山が荷になる暑さかな

關宿舟中

暑き夜の荷こ荷の間にねたりけり

江戸住人

暑き日や青草見るも錢次第

田中川原如意湯に
晝浴して

尙暑し今來た山を寢て見れば

隠家や夏は日にく暑くなる

暑き日や火の見櫓の人の顔

暑き日に何やら埋む鳥かな

暑き日の目出度や白に腰かけて

梨柿のむだ實こほる、暑かな

白山の雪きらくこ暑さかな

身一つをひたこ苦になる暑かな

暑き日や忘る、草を植わてさへ

満月に暑のさめぬ疊かな

暑き夜をこうく善光寺詣かな

暑き日を囃に行くや小鹽山

大帳を枕にしたる暑さかな

暑き日の寶ミや申す小藪かな

草の葉に願通りの暑さかな

暑き夜や蝙蝠翔る川端に

暑き日に面で手習した子かな

落の葉にほんミ穴あく暑さかな

米直段くつくつミ下る暑さかな

暑き日や庇をほじる馬鹿鳥

あゝ暑し何に口あく馬鹿鴉

更衣

草庵

其門に天窓用心更衣

更衣世に飽きたミは言ひながら

裕

若衆は浴衣ぞいざや更衣

上見なミ言ふ人が先づ更衣

衣更へて座つて見てもひさりかな

けふの日や更ても同じ昔衣

人らしう更へも更へたり昔衣

親さいふ字を拜むなり更衣

年間へば片手出す子や更衣

下谷一番の顔して更衣

古裕をかうて

さこの誰が死がらならん初裕

文虎が妻みまかりけるに

織りかけの縞目にかゝる初裕

小供の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初裕

大山詣

四五間の木大刀をかつぐ拾かな

行先にさもなき人の拾かな

金太郎が膝ふしぎりの拾かな

春日野の鹿に嗅るゝ拾かな

ふだらくや赤い拾の小巡禮

立ながら綿ふみぬいて出たりけり

南無阿彌陀きてらの綿よ暇やるぞ

灌 佛 二三文錢も景色や花御堂

水ざぶり佛なりやこそ天窓から

今の世や猫も杓子も花御堂

鶯のほゝこのぞくや花御堂

永日にかわく間もなし誕生佛

雀子も同じく浴る甘茶かな

折釘にかけたところが粽かな

がさくゝ粽を咬る美人かな

粽

私が引結んでも粽かな

粽解く二階もみゆる角田川

笹粽手本通りに出来ぬなり

浅茅生に又敗くなり粽殻

粽結ふ顔も披露や入る座敷

鮮賣の急がぬ聲に暮涼し

中々に精進鮮のかるみかな

鮮になる間を配る枕かな

旅人や山に腰かけて心太

浅ら井や心魚も遊ぶ心太

逢阪や手の上から心太

はつたいにあれむせ給ふ使僧かな

甘露降る夜もそつちのけ一夜酒

神風のふくや一夜に酒なる

神代にもあらず一夜にこんな酒

鮮

心 太

はつたい

一夜酒

冷汁 やさつこ折れこむ雷

冷汁のむしろ引摺る木蔭かな

冷汁や庭の松蔭櫻蔭

蟲干 蟲干の蟲やぞろ／＼脊中から

蟲干を脊中とするや草枕

逃るなり紙魚が中にも親ミ子よ

帷子 青空のやうな帷子着たりけり

帷子にいよ、四角な親爺かな

京の夜や白い帷子白い笠

日傘 母親にさしかけさせし日傘かな

あんよ／＼や母を日傘持

水呑をまつ／＼はさむ日傘かな

夜は天ミ一つ色なり日傘

扇 老けりな扇づかひの小せはしき

松に腰かけて土民の扇かな

鼻先に智恵ぶらさけて扇かな

白扇風の音さへ新しき

まで暫し扇流すぞ都鳥

西行の眞似してかざす扇かな

御祭や誰が子寶の赤扇

衰のけふに見えけり赤扇

乙松やこし祭の赤扇

小道者や手を引かれつゝ赤扇

太郎冠者まがひに通る扇かな

腰に置くばかりでも涼し白扇

松蔭や扇で招く千兩雨

駕先を下に／＼ミ扇かな

手にまればあるきたくなる扇かな

丁寧に鼠の喰ひし扇かな

西山や扇落しにゆく月夜

寢謠の尻べたたく扇かな

夕ぐれの腮につッばる扇かな

橋の欄干にもたれて扇かな

貫ふより早くうしなふ扇かな

大寺や扇で知れし小僧の名

團扇 仰向に寝て青丹よし奈良團扇

江戸の水のむこて左團扇かな

白引が白こねまりて團扇かな

ま、つ子が一つ團扇の修覆かな

老の部ぞいつしか後にさす團扇

春の子が盧生もさきの團扇かな

喰はず貧にこて左團扇かな

畫團扇をくしやくにする童かな

小僧しや扇の中なる小盃

京人はあかるさ知らず紙の翳

翳

手を摺りて翳の小隅を借りにけり

田の人よ御免候へ晝寢翳

翳吊りて喰に出るなり夕茶漬

裏住やそりの合ひたる一人翳

ひこりねの太平樂の紙帳かな

初めから吊りはなしたる紙帳かな

留守中も吊りはなしたる紙帳かな

ごろり寝や紙帳の穴の三日の月

病後

塵の身こもにふはく紙帳かな

庭鳥に踏まれて育つ鹿の子かな

上人の聲を聞き知る鹿の子かな

鹿の子やきやつこいふから人擦れる

膝の上へのほりさうなる鹿の子かな

女鹿 大聲に子を引かくす女鹿かな

俄川みんで見せけり鹿の親
鹿の親笹ふく風に戻りけり

時鳥

館持の書に

遣るまいぞどつこいその時鳥

老翁岩に腰かけて一軸
を授くる圖に

我汝をまつここ久し時鳥

谷藤波

道渡る橋の下より時鳥

鎮西八耶爲朝人磔うつ
所に

時鳥蠅蟲めらもよつく聞け

も一聲まけろこれく時鳥

是でこそおん時鳥松に月

夏山や鶯雉子時鳥

✓これは扱影耳に水の時鳥

眞夜中におしかけ鳴くや時鳥

時鳥二聲鳴けば夜が明ける

お江戸まで只一聲か時鳥

大江戸やをめす隠せず杜宇

せはしさを我にうつすな時鳥

時鳥俗な庵ささみするな

此雨にのつびきならじ時鳥

時鳥なげや頭痛のぬける程

卯の花も馳走にさくか時鳥

裏殿の葬禮はやせ時鳥

この間に鼻つまゝれな時鳥

時鳥けんもほろゝに通りけり

築山や祝ひて一つ時鳥

時鳥通れ辨慶こゝにあり

其通石もなくなり時鳥

耳一つおん貸し玉へ時鳥
宵の雨拂子なけたか時鳥
一聲や待衆山の時鳥
歩行ながら傘ほせば時鳥

閑古鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へはかう參れミか閑古鳥
よい聲を鼻にかけてや閑古鳥
先住のつけ渡りなり閑古鳥
閑古鳥泣坊主相違なく候
柿崎や遊々鳴の閑古鳥
我家に恰好鳥なきにけり
閑古鳥つゝじは人に喰はれけり
我友に相應したる閑古鳥

水鷄

行々子

切株に摺鉢著せて閑古鳥
籬なき幽に見わて閑古鳥
大酒の諫言らしや閑古鳥
木母寺の鉦の眞似しておく水鷄
我庵を夜ミ思ふか鳴水鷄
水鷄なく拍子に雲が急ぐぞよ
四五町のこゝで來ぬなり鳴水鷄
水鷄さへたゝかすなりぬ老が家
禿天窓たがをかけるミ行々子
今の間に一行々子過ぎにけり
へら鷺は無言の行や行々子
葎切や一本竹のてんべんに
十日程雨うけ合ふか行々子
雨乞が馬鹿ノしミや行々子
馬の子の寢入ばななり行々子

行々子一本腹ぞこゝろせよ

老 鶯 鶯よ老をうつすな草の家

通し鴨 待て居る妻子もないか通し鴨

羽ぬけ鳥 憎まるゝ鳥は羽もぬけぬなり

馬鹿鳥よ羽ぬけてから何思案

人里を兎角たよるや羽抜鳥

中々に安堵顔なり羽抜鳥

蝙蝠 蝙蝠やさらば汝ミ兩國へ

烟して蝙蝠の世もよかりけり

蝙蝠や鳥なき里のめし時分

蝙蝠や仁王の腕にぶら下る

百日施行

蝙蝠が中で噪ぐや米瓢

松 魚 馬上からおゝいおい申す初松魚

大家や犬もありつく初松魚

妻

我宿のをくれ松魚も月夜かな

水道の水いつ浴びて初松魚

芝浦や初松魚から夜が明ける

大將の前やきつさり初松魚

一切も松魚さわざや隠居町

江戸末や一切買ふも初松魚

妻我をつくづくねめつける

雲を吐く口付したり妻

電で天窓なでけり妻

蟾殿の妻や待つらん子鳴くらむ

霧に乗る目付して居る妻

卯の花のほろりゝや妻の塚

罷り出たるは此籤の妻にて候

古妻が肩にかけたり蛇の衣

法の世や蛇もそつくり捨衣

蛇 衣

しほらしや蛇も浮世を捨衣

子
子

寺の庭にて

子子も御法の拍子こりにけり

子子よ精出して振れ壺は盆

子子が天上するぞ三日の月

けふの目も子子むしよ壺も又

子子や夜は結構な堀の月

蚊

曲者隠れて覗ふ圖

哀れ蚊のついこ古井に忍びけり

我宿は口で吹いても出る蚊かな

我一人喰ひて淺茅に鳴く蚊かな

釣鐘の中よりわんこ鳴く蚊かな

隙人や蚊が出たこ振れ歩行

櫻までわるく言はする藪蚊かな

門の藪蚊の出る計り一景ぞ

晝の蚊やだまりこくつて後から

蚊の出で蚊の焼く草の生えにけり

年寄こ見てや鳴く蚊も耳の側

閨の蚊の残りこて焼かれけり

晝の蚊をうしろにかへす佛かな

蚊の聲に馴れてすやく寝る子かな

宵越の豆腐明りに鳴く蚊かな

夕ぐれや蚊の鳴き出して美しき

閨の蚊のぶんこ計りに焼かれけり

柱事なきして遊ぶ藪蚊かな

南無阿彌陀佛の方より鳴く蚊かな

蚊もいまだ大哀れなり江戸の隅

一つ蚊のだまつてしくりかな

嫌はれて長生したる藪蚊かな

蚊がちらりほらりこれから老が世ぞ

御佛に咬りついたる蟻蚊かな
閑の蚊の初出の聲を焼かれけり
かはいらし蚊も初聲ぞ初聲ぞ
壁に生ふる一本草や蚊のこもる
蚊柱の外に能なき櫃かな
蚊柱の穴から見ゆる都かな

蚤

歸 庵

蚤ごももまめ息才ぞ草の庵
蚤焼いて日和占ふ山家かな
蚤のあま敷へながらに添乳かな
こべよ蚤同じこみなら蓮の上
まゝつ子や晝寢仕事に蚤拾ふ
蚤ごべや野良は刈萱女郎花
草原にこすり落すや猫の蚤
蚤ごもに松島見せて放ちけり

羽 蟻

こぶな蚤それくこそが隅田川
よい日柄蚤が躍るぞ跳るぞよ
蚤咬んでねせて行くなり猫の親
厄病神蚤も負はせて流しけり
きのふには一倍増せる羽蟻かな
羽蟻出るまでに目出度き柱かな

蜘蛛の子

蜘蛛の子のちりこまりより三日月
蜘蛛の子の皆ちりくくに身過かな

火取蟲

入相のかねくかねて火取蟲
され程に面白いのか火取むし
火取蟲咄の腰を折られけり
木がくれや火のない庵に火こりむし
此雨に晴間をまたで火取蟲
庵の灯は蟲さへこりに來りけり
雨三度うらく下手な火取蟲

消してよい時分に来るなり火こり蟲
むだ囃蟲に行燈消されけり
如此決定してや火取蟲
逃された草にうちく火取蟲
斑猫に追れついでや火こりむし

尺とり蟲

圖 箱

蟲にまで尺こられけり此柱

斧の刃や尺こりむしのこりもぎる

手弱女の側にする寄る毛蟲かな

それそこそこが蟻の地獄ぞ這ふ毛蟲

なつかしや床しや蟬の捨衣

もろ蟬のなきこほれけり笠の上

初蟬のうきを見んくみいんかな

蟬なくや山から見ゆる大座敷

蟬なくやつつくく赤い風車

毛 蟲

蟬

狗にこゝへ來よこや蟬の聲

鰯口の口の奥なり蟬の聲

露の世の露になくなり夏の蟬

松の蟬さこ迄鳴いて晝になる

湖に尻を吹かせて蟬の鳴く

山蟬の袂の下を通りけり

初蟬さいへば小便したりけり

願くは念佛を鳴け夏の蟬

蟬なくや神木の釘ぬける程

蟬なくや天にひつつく筑摩川

蟬なくや我家も石になるやうに

獨樂坊を訪ふに
錠のかよりければ

蠅除の草もつるして扱きこへ

歸 庵

笠の蠅我より先にこび入りぬ

—夏—

心に思ふことを

古里は蠅まで人を刺しにけり
 留守の中静に遊べ庵の蠅
 おん首に蠅が三匹をまつた
 なぐさみに蠅なきこるや庵の猫
 塗笠にころりミ蠅の入りけり
 蠅除の羽織かぶつて泣く子かな
 人一人蠅も一つや大座敷
 豊年の聲を揚げけり門の蠅
 縁の蠅手を摺るころうたれけり
 ✓蠅一つうてば南無阿彌陀佛かな
 蠅うてば蝶もこそく立ちにけり
 蠅うつてけふもきりけり山の鐘
 笠の蠅もう今日からは江戸者ぞ
 世がよくばも一つ生まれ飯の蠅

水 馬
 蜻 牛

長生の蠅や蚤蚊や貧乏村

侍に蠅を追はせる御馬かな

✓やれうつな蠅が手を擡る足を摺る

草の葉や世の中よしミ蠅さわぐ

山水の澄むが上にも水馬

俚俗に蜻牛を
でいるといふ

此雨のふるにさつちへでいろかな

大いけんして曰く

蜻牛見よく己が影法師

夕立や大肌ぬいで蜻牛

柴の戸や錠の代りに蜻牛

並んだぞ豆粒程の蜻牛

朝焼が喜ばしいか蜻牛

雨一見の蜻にて候

蜻牛そろくほれ不二の山

—夏—

螢

—夏—

相 壺

源氏三つとし我もみつの
とし母に棄てられたれば

孤の我は光らぬ螢かな

不 忍 池

螢火や呼ばぬ龜は膳先へ

來よ螢一本草も夜の露

合點して螢もねるか夏花桶

初螢都の空はきたないぞ

京を出て一息つくか初螢

初螢ついそそれたる手風かな

大家を上手に越ゆし螢かな

寝むしろや野原目前にミぶ螢

出よ螢錠を下ろすぞ出よ螢

腕籠に上手に潜む螢かな

行くな螢都の空はやかましき

初螢女の髪につながれな

市中や大骨折りてミぶ螢

きれ草鞋螢ミならば隅田川

骨折や闇の五月をゆく螢

夜に入れば螢の花の芥かな

手枕やほんのくほより飛ぶ螢

飯櫃の螢追ひ出す夜舟かな

今吊つた草にあれく初螢

わんぱくや縛られながら呼ぶ螢

一三人逼人をきよくつてゆく螢

和睦せよ石山螢瀬田螢

落の葉に引つゝんだる螢かな

勝螢石山さして引きにけり

ねた振をすれば天窓に螢かな

ミぶ螢泪の露がなりつらむ

—夏—

鍋尻にちらり〜ミ螢かな
 役士の箸にからまる螢かな
 初螢なぜ引かへすおれだぞよ
 蚊いぶしの草も知らぬ螢かな
 入相の鐘に撞き出す螢かな
 呼聲の張合にミぶ螢かな
 蘆の家や暮れぬ先からミぶ螢
 螢籠帷光これへミ召されけり
 初螢其手は喰はぬ〜ミや
 逃けて来て溜息つくか初螢
 片息になりて逃入る螢かな
 人聲の方へやれ〜初螢
 大螢ゆらり〜ミ通りけり
 娘見よ身を賣られつゝゆく螢
 もう一つ川を越えよ〜ミぶ螢

李

青

瘦せたりな門の螢にいたるまで
 ゆけ螢さく〜人の呼ぶ中に
 我袖を親ミたのむか逃螢
 葉がくれの赤い李になく小犬
 青梅は氣のへる計り落るなり
 梅漬の指をつく〜眺めけり

卯の花

獨樂坊

寢處見る程は卯の花明りかな
 卯の花や白の目切ミ螢ミ
 卯の花の垣に名代の草鞋かな
 卯の花や神ミ乞食の中に咲く
 卯の花の吉日もちし後架かな
 卯の花に一人きりの庵かな
 卯の花も佛の八日つミめけり
 卯の花の宿や鬼王新左衛門

卯の花の花の無きさへ賣られけり

椿ありひめ糊もあり花卯木

魚淵が園に黒と黄との紙の

ぼたんを作りて人目を欺く

紙屑も牡丹顔ぞよ葉がくれに

福も福大福花の牡丹かな

雨の夜や鉢の牡丹の品定め

てもさてもも福相の牡丹かな

是程の牡丹も仕方する子かな

福の神降らせ給へ牡丹咲く

扇にて尺をこらせる牡丹かな

天晴の大若竹ぞ見ぬ中に

若竹の子さへのがれぬ憂世かな

せい出してそよけ若竹今の中

若竹も若い中にて戦ぐなり

赤注連や抱瘡神のこしし竹

牡丹

若竹

笋

若竹をたのみに思ふ小家かな

雀等も何か讀むぞよこしし竹

それであれ薄紫のこしし竹

若竹やさも嬉しけに嬉しけに

君が代や代やも騒ぐも今年竹

若竹も言はるゝも一夜二夜かな

なよ竹や今の若さを庵の垣

うれしいか垣の小竹も若盛

笋に病のなきはなかりけり

笋や女もほじる犬の真似

笋よ人の子なくば花咲かむ

筍も名乗るか唯我獨尊こ

君が代は山笠も子を育てけり

笋の千代もほつきり折れにけり

役馬の立ねむりする柿の花

柿の花

遊柿の遊々花になりけり

茨の花 古里や西も東も茨の花

茨の花こゝをまたけみ咲きにけり

茨垣犬の上手にもぐりけり

合歌の花 合歌咲くや七つ下りの茶菓子賣

芥子の花 二十四年榮華只一夢

善盡し美を盡しても芥子の花

高清水の山中心地悪しく

稍杖を曳くに山賊につけられて

さはつたら我身ながらも芥子の花

僧になる子の美しや芥子の花

門番のほまちの芥子の咲きにけり

桑の木は坊主にされて芥子の花

芥子提げて群集の中を通りけり

鶴鶴は神のたよりか杜若

今朝程は塵に一本杜若

杜若

蓼

通路に梯子渡すや杜若

馬の子の口つん出すや杜若

まゝな世や蓼喰ふ蟲こ火こり蟲

肴屋の裏こ知れけり蓼島

蓼の葉と握つてゆくや酒の錢

團扇はつてまつそよがする蓼かな

世を捨てぬ家に咲くなり苦の花

庵の苦花咲く術も知らぬなり

山苦も花さく世話は持ちにけり

昔は荒れ花の咲きけり一つ家

我上へ今に咲くらむ苦の花

昔花の今一入ぞ花なくば

青昔の自慢をきゝに来る花

花さわぎせずこもがな深山昔

水かけて夜にしたりけり釣葱

蓼
苦の花

釣葱

罌吊草

麥

野に伏さば罌吊草もたのむべし
 かくれ家の柱で麥をうたれけり
 首だけの水にもそよぐ穂麥かな
 麥秋や子を負ひながら罌賣
 麥秋やほんの秋より寒い秋
 麥秋のあてこももない夜寒かな
 加茂川に今日は流るゝ葵かな
 傘持は葵かけつゝくすねかな
 祭にも逢はで突つ立つ葵かな

葵

なでしこ

男混藏の失せける時

なでしこや地藏菩薩のあこさきに
 なでしこやまゝはゝ木々の日陰草
 江戸ありて花撫子も賣れにけり
 なでしこや片陰出来し夕藥師
 なでしこや人が作れば尙曲る

茄子

瓜

なでしこに日の目も見せぬ小笹かな
 なでしこに二文が水を浴びせけり
 鉢植や見る計りなら初茄子
 我庵の巾着茄子の憎々し
 初茄子扱大兵の使かな
 柴の戸や貰うたる日の初茄子
 手のひらに見て居る中や初茄子
 さと女笑顔して夢に
 見えけるまゝに
 頬べたにあてなきしたる眞桑かな
 みびこんで蛙もなれ冷し瓜
 葉かくれの瓜を枕に子猫かな
 お座敷や瓜をむくさへ六かしく
 人來たら蛙になれよ冷し瓜
 三月月三一つ並びや冷し瓜
 初瓜を引さらまへて寝た子かな

夕顔

源氏の題にて

夕顔や男結の垣に咲く

夕顔に尻を揃へてねたりけり

夕顔の花で鼻かむお婆かな

直き世や小銭程でも蓮の花

大ききよ見ても在家の蓮の花

スツボンも夕飯得たか蓮の花

人喰つた蛇も乗るなり蓮の花

丘の家や蓮に吹かれて夕茶漬

蓮の葉にのせたるやうな庵かな

さく花もこの世の蓮は曲りけり

門々は残らず蓮の月夜かな

蓮の葉になんむくくさいふ子かな

萍の花を眺めて添乳かな

萍や花の盞の沼太郎

萍

萍の株にして咲く門田かな

萍や浮世の風のいふなりに

萍や裸童が首筋に

萍の花よこい／＼爺が茶屋

萍の花から乗らむあの雲へ

九輪車四五輪草でしまひけり

むだ花にけしきまられて青瓢

九輪草

青瓢

秋

小僧連細勸進

秋日和

なぐさみのはつちくや秋日和

佛さへおるすなりけり秋日和

秋日和も思はない凡夫かな

秋の日に力を添ふる若葉かな

立 秋

狗子在佛性

秋來ぬも知らぬ狗が佛かな

けさ秋さいふ計りでも老いにけり

三越路は秋立つ日より村時雨

今朝秋や瘧の落ちたやうな空

秋立や隅の小隅の小松島

立秋は風の科でもなかりけり

秋立さいふ計りでも寒さかな

秋の夜

板敷山の露に臥して

秋の夜や祖師も個様な石枕

病 床

扱永い夜が永いぞよ南無阿彌陀

秋の夜や障子の穴が笛を吹く

秋の夜や寢あまる罪は何貫目

秋 風

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

さと女三十五日

秋風やむしりのこりの赤い花

正見寺の上人十ばかりなる
後住を残して遷化ありし哀さに

秋風や小さい壁の穴かしこ

秋風や蓮生坊が馬の尻

金釘のやうな手足を秋の風

秋風や草も角力こる男山

秋風のふきぬく四條通かな
 秋風にあるいて逃る蜚かな
 蝸牛の拾家いくつ秋の風
 秋風やむしりのこりの赤い花
 墨染の蝶がこぶなり秋の風
 開帳の降りつぶされて秋の風
 秋風や壁のへまムシヨ入道
 乳ばなれの馬の顔より秋の風
 さほてんの鮫肌見れば秋の風
 牛の子の旅へ行くなり秋の風
 唐紙の引手の穴を秋の風
 草の葉も人を刺すなり秋の風
 寝むしろや野分に吹かす足の裏
 初嵐まごが萩の間桔梗の間
 秋風や角力の果の道心者

秋雨

豊秋

霧雨

二軒家や二軒餅搗く秋の雨
 堂守ご撞木に寝たり秋の風
 霧雨や日々に梢の薄明り
 霧雨や夜霧晝霧我庵は

寒さ

影むしろや風忘れてや、寒き
 うそ寒を早合點の蜻蛉かな
 うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ
 朝寒の中に参るや善光寺
 朝寒や垣の茶笈の影法師

夜寒

戸惑せし折からに
 小便所こゝミ馬よぶ夜寒かな
 若法師の扇面に
 影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩行

旅

一人ミ帳面につく夜寒かな

老 樂

子供等を心で拜む夜寒かな

のらくらが遊び加減の夜寒かな

親ミいふ字を知りてから夜寒かな

摺小木もけしきに並ぶ夜寒かな

膝頭木昨の夜寒に古びけり

木兎のやうにちよんほり夜寒かな

老が身は鼠も引かぬ夜寒かな

おち翎の家のごち／＼夜寒かな

赤馬の苦勞を撫でる夜寒かな

窓際や蟲も夜寒の小寄合

から樽を又ふりて見る夜寒かな

寒いのはまだ夜のみで裏の山

若い衆のつき合に寝る夜寒かな

寝て暮す人は喜ぶ夜寒かな

盆の灰いろは書く字の夜寒かな

鉾村に豆腐屋出来る夜寒かな

兩國の兩方ミもに夜寒かな

寝くらしに丁度よい程夜寒かな

六十に二つ踏みこむ夜寒かな

今見ても石の枕の夜寒かな

肋骨撫でずミすれミ夜寒かな

うつくしや障子の穴の天の川

我星はひもりかもねん天の川

ほんのくほから冷しけり天の川

山かけも歌で祭らや天の川

古里に流れこみけり天の川

稻妻にへなく橋を渡りけり

稻妻や島の中の風呂の人

稻 妻

石川はくわらり稻妻さらりかな

手枕や稻妻かゝるふり茄子

稻妻や一切づゝに世が直る

稻妻やうつかりひよんこした顔へ

稻妻に並ぶやされも五十顔

豊年の大稻妻よ稻妻よ

男女私にちぎりて夜

ひそかに逃行くを教訓して

人間は、露こ答へよ合點か

愛子を失ひて

太子堂懷舊

吊鐘は草に吹かせて石の露

御目出度存候今朝の露

毒蟲もいつか一度は草の露

露の身の置きころなき草の露

露

露の玉つまんで見たる童かな

火こもして生面白や草の露

露はらりくゝ大事の浮世かな

白露に淨土まるりの稽古かな

露置くや茶腹で越ゆる宇都の山

田かせぎや人の上にも露の置く

露散るや地獄の種を今日も蒔く

いざ拾へ露の曲玉長い玉

しだり尾の長き納涼の夜露かな

露散るやむさいこの世に用なし

露の玉つまんだ時も佛かな

置く露や晴天十日つゞくまで

露散るや五十以上の旅人家

行先や鼻の柱も秋の露

草の露なんの苦もなく並びけり

露散るやかき集めたる米こ砂
 朝露こ一緒に仕舞ふ花屋かな
 甘い露芭蕉烈くこて降りしよな
 野の馬の頭干すなり秋の露
 狩好の其身にかゝる夜露かな
 腕にも露が置くなりおん茶賣
 世の中はよ過ぎにけらし草の露
 上出来の淺黄空なり秋の露
 露の玉袖の上にもころけけり
 蓮の露佛の身には甘からむ
 露の玉遊びみころや茶の畑
 露の世の露に並ぶや博奕小屋
 露散るや我精進はやがて誰
 露の身の一人通るこ書く柱
 若衆が無理に受けたる夜露かな

花賣の筋に散るや今朝の露
 露散るや各々明日は御用心
 甘からば喉おらが露人の露
 夕霧や馬の覽えし橋の穴
 霧晴れて足の際なる佛かな
 有明や浅間の霧が膳を這ふ
 さむしろや一文錢に霧の立つ
 秋霧や川原撫子見ゆる迄
 飛ぶ鳥を越えてゆくなり秋の雲

門の月殊に男松の勇み聲
六月よりの片照り所々の
 雨乞も験しなかりければ
 十五夜や丁度持ちこむ祈り雨
 娘捨山
 けふこいふ今日明月の御側かな

筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山

十五夜は高井郡
梨本氏にありて

古里の留守居もひこり月夜かな

己が味噌の味噌臭を知らず

蕎麥花のたんをきりつゝ月見かな

病中

名月やミばかり立居むづかしき

赤馬關

名月や蟹も平氏を名乗り出て

やかましかりし
老婆ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月

旅

これ程の月や我家にねて見たら

生娘の門あるきする月夜かな

壺の夜の月を請合ふ爺かな

開く口へ月がさすなり角田川

月も月そもく大の月夜かな

今日あすの盆さへ缺る月夜かな

赤い月これは誰がのじや小供達

世をのけた甲斐あり更けて月を友

名月や高観音の御膝元

名月や女だてらの頬冠

山里は汁の中まで明月ぞ

名月や寝ながら拜むていたらく

明月や八重山吹のかへり花

十五夜や月の代りに雨が降る

雨年や十五夜こても只の山

この秋は精進酒の月見かな

明月の御覽の通り屑家かな

酒盡きてしんの座につく月見かな

名月や先づはあなたも御安全
庵の隣松に預けて月見かな

金上戸ミ金鷲ミ月見かな

名月やおのが外にも立地藏

名月や宛にもせざる壁の穴

明月をとつてくれるミ泣く子かな

名月のさつさミ急ぎ給ふかな

名月や五十七年旅の秋

名月の御名代かよ白兔

十五夜の造酒にも菊をちよいさす

目の役に拙者がならう月見かな

名月や膳へ這寄る子があらば

山里は小鍋の中も名月ぞ

初藏の陰の小家も月見かな

名月に乗じてかつぐ鐵砲かな

御祝儀に月見てゑる庵かな

名月や下戸はしんくしんの座に

深川や蟻殺山の秋の月

たのもしやまだ薄曇き三日の月

むだ草も穂に穂が咲いて三日の月

三日月や江戸の苦屋も秋の暮

戻りにはミこの橋越えん星月夜

江戸川や月待宵の芒舟

八月や雨待宵の信濃山

むし立の栗名月の座敷かな

盗めミの庇の餅や十三夜

月の顔年は十三そこらかな

借上に蝕名月の目利かな

人の世は月も惱ませ給ひけり

満上に月の缺くるを日和かな

十五夜や闇になるのも待遠き
二番目の大名月ぞ名月ぞ
もこの名月になりけり明けにけり

秋の暮

大阪を出帆して

秋の空吹かれ次第や秋の暮

連にはぐれて

一人通る三壁に書く秋の暮

母のなき子の遺習ふに

幼な子や笑ふにつけて秋の暮

病後

ゑいやつミ生きたミころが秋の暮

活きて又逢ふる秋風秋のくれ

ゆくな雁住めばさつこも秋の暮

柴ちよほく遠山つくる秋のくれ

近付の落書見わて秋の暮

二百十日
秋の山
秋の原
行秋

二百十日田中の旭拜みけり

秋山や雨のない日は嵐吹く

秋の原知つたら何ぞうたふべき

秋も早西へ行くなり隅田川

行秋を尾花がさらばかな

墨染の蝶の出立や秋のくれ

錢金を知らぬ鳥さへ秋の暮

秋のくれいづここまりの一つ鳥

膝だいて羅漢顔して秋のくれ

中々に人ミ生れて秋の暮

我松も腰が屈みぬ秋の暮

蘆の穂を蟹がはさんで秋の暮

おれのみが舟を出すなり秋の暮

隠家や飲手を雇ふ秋の暮

それがしも宿なしに候秋の暮

今日まではまめで鳴いたきりぐす

七夕

田中にて

七夕や涼しき上に湯につかる

若々し星はこもしも妻通ひ

七夕や野らも願の糸芒

嫁星の御顔をかくす覆かな

星待や龜も涼しいうしろ付

御馳走に涼風ふくや星の闇

新潟や翌待宵の星むかへ

涼しさは七夕竹の夜露かな

誰が願星に一葉のふき散るは

七日の夜只の星さへ見られけり

星様の囁き給ふけしきかな

俣星にいで披露せむ稻の花

禪に笛つきさして星むかへ

孟蘭盆

亡妻新盆

かたみ子や母が来るこて手をたたく

草鞋ながら墓参して

息才で御目にかゝるぞ草の露

山里やあゝのかうの三日延盆

夕酒や我身をおれが生身魂

浴して我身になりぬ盆の月

這出たる主頼母し生身魂

孟蘭盆の月願ひしは昔なり

来て見れば在家なりけり高燈籠

玉棚や上座して鳴くきりぐす

おれが場もよく頼むぞよ佛達

迎火は草のはづれのはづれかな

精靈の立振舞の月夜かな

あの月は太郎がのだぞ迎鐘

末の子や御墓参の箒持

古犬が先に立つなり墓参

月かけにうかれ序や墓参

角力 勝角力虫の音除けて通りけり

角力取に手をこらせたる女かな

わき向て不二を見るなり勝角力

年寄をよけて通すや角力取

相撲場や今朝はいつもの常念佛

草花を肥でなぶるや勝角力

攝待 攝待の名主は石の佛かな

攝待や評判たのむ庭の松

駒引 駒引や駒の威を借る咳拂

逢坂や手馴れし駒に暇乞

駒引よ蕎麥の世並はこの位

草くれてさらばくや駒の主

踊

錢別に草花添へて駒むかへ
一袋蕎麥も添ひけり駒むかへ
朝夕に手馴し駒を今や引

佛都

御佛の留守事に大踊かな

五十年踊る夜もなく過ぎにけり

穗芒のあをり出さるゝ踊かな

踊から直に草こるさわぎかな

泣くなきて母が踊るや門の月

田守 橋守の火を力なり山田守

人ありこ見せる草履や田番小屋

茶山子 嫉捨はあれに候ミ案山子かな

照る月をかこち顔なる案山子かな

乳呑子の風除に立つ案山子かな

人はいざ直な案山子もなかりけり

身の老や案山子の前も恥しき

鳴子

寢嘶の足で折々鳴子かな

追従に鳴子引くなりもの貰ひ

鳴子など引きて暮らさむ窓の雨

新酒

行く秋を唄で送るや新酒屋

家並みて拾配する新酒かな

八兵衛が破顔微笑や今年酒

鹿

南都

秋の夜や本町筋の鹿の聲

戀してふ角きられけり奈良の鹿

鹿なくや今二三町遠からば

吼る鹿おれをうさんと思ふかよ

角ありこ夜は思はず鹿の聲

鹿鳴くや大きな里の大月夜

春日野や駄菓子に交る鹿の糞

小男鹿やこしし生れも秋の聲

鳴くな鹿柳が蛇になるからに

鳴鹿の片顔かくす鳥居かな

神前に鳴く棹鹿も子や欲しき

下手笛によつく聞けこや鹿の聲

不性鹿ねて居てひゝこ答へけり

やさしさや鹿も戀路を迷ふ山

鳴なくや深山の鹿も色このむ

老いぬれば聞くこはなしに夜の鹿

戀風や山の深山の鹿にまで

足枕手枕鹿の睦しや

山寺や縁の上なる鹿の聲

水いらぬ親子暮しや山の鹿

棹鹿のしの字に寝たり長々こ

棹鹿も親子三人暮しかな

棹鹿や片膝立て、山の月

裏窓や鹿の氣取の犬の聲

又鳴や鹿も必定逢はぬ戀

鹿鳴けば蟲もねまりはせざりけり

小男鹿や芒の蔭の養夫婦

夕暮や鹿に立添ふ羅漢顔

有明や鹿十ばかり對に鳴く

息才に紅葉見るよ夫婦鹿

外が濱

今日からは日本の雁ぞ樂に寢よ

旅にあり

雁なくや哀れこしも片月見

あれ月がくゞ雁のさわぎかな

それ程に人用心や小田の雁

雁なくな馬でも呑むぞ八兵衛は

初雁もこまるや聲の輕井澤

下りる田や三べん舞うて雁下りる

白河や曲り直して天つ雁

下りよ雁一目散に我前へ

雁なくや御成も知らで安堵顔

片足立して見せるなり小田の雁

雁さもが夜を日について渡りけり

門の雁片足かけて思案かな

田の雁や里の人数はけふも減る

雁なくや難なく碓井越えたりこ

初雁の三羽も竿さなりにけり

細烟侮りもせで来る雁よ

初雁や宛にして来る庵の鳥

木母寺の古き夕や蘆に雁

大組を呼び下ろしけり小田の雁

天津雁おれが松には降りぬなり
初雁や芝は招く人は追ふ

一盛一衰

鳴立や門の家鴨も貫泣

三味線で鳴を立たせる潮來かな

つくづくミ鳴我を見る夕かな

立つ鳴の今日にはじめぬ夕かな

小烟やさて又の鳴の影法師

我門の餅戀鳴のなきにけり

朝夕や峰の小雀の門馴るゝ

土臭き鳥はづれや鳴く鶉

山雀の輪ぬげのながら来りけり

六かしやされが四十雀五十雀

ざわ／＼し女組やら五十雀

何用にあまへ戻るぞ渡り鳥

鳴

小雀

鶉

山雀

五十雀

渡り鳥

さう追はれても人里を渡り鳥

燕の親子揃うて歸りけり

木啄の稽古にた／＼柱かな

木啄の目利して居る庵かな

木啄のやめて聞くかよ夕木魚

木啄の仕合せいかに夕の月

鶉の聲堪忍袋きたりな

頬けたをきり下けられぬ鶉の聲

まらうけたやうな鴨上戸かな

きり／＼す聲が若いぞ／＼よ

米櫃の中や鈴蟲きり／＼す

簀村や燈籠の中にきり／＼す

寢かへりをするぞ脇よれきり／＼す

彌陀堂の土になる氣かきり／＼す

白露の玉ふんかくなりきり／＼す

歸燕
木啄

鶉

鴨

きり／＼
す

お、そうじや逃るが勝ぞきりくす
齒きしみの拍子さもなりきりくす
よい聲のつれはさうしたきりくす
錢箱の穴から出たりきりくす
きりくすかゝしの腹で鳴きにけり
きりくす身を賣られてぞ鳴きにけり
藁三匹寄れば喧嘩かな

暮 おこなしく留守して居る藁

機 織 機織るやこの世は蟲にいたる迄

鈴 蟲 蟲も鈴振るや住吉大明神

鯛 鯛のすゞしくしたる家陰かな

秋の柳 仰向に落ちて鳴きけり秋の蟬

尻ひり蟲 經 堂

蟲の尻を指して笑ふ佛かな
團子召せ蟲も尻をひる爺が家

蠅 蠅

尻ひり蟲爺が垣根ぞ知られけり
ブン／＼蟲も尻をひる山家かな
おれよりもはるか上手ぞ尻ひり蟲
窓に来て鳴かはりかよ尻ひり蟲
植えた木も花をさかせよ尻ひり蟲
御佛の鼻の先にて尻ひりむし
蠅螂や五分の魂これ見よこ

蠶 蠶

其分にならぬ／＼蟲螂かな
したゝかに人蹴つてさぶ蝗かな
枯々の中に戀する蠶かな

螽 螽

螽ばつたりさぶぞ世がよい／＼こ
御祝儀に螽さぶなり馳走砂

蜻 蛉

大膽の赤蜻蛉や神路山
蜻蛉の臀でなぶるや大井川
瘦脛やためつすがめつみる蜻蛉

御祭に赤い出立の蜻蛉かな

蜻蛉も紅葉の真似や龍田川

けふもく糸引すつて蜻蛉かな

蜻蛉の江り落ちたる天窓かな

遠山が目玉にうつる蜻蛉かな

百尺の竿の頭に蜻蛉かな

三日月を睨みつめたる蜻蛉かな

蟀の大聲揚ぐる三十日かな

蟀のころくひひり笑かな

蟀のさぶや唐箕の埃先

蟀のうけこつて鳴く垣根かな

蟀の霜夜の聲を自慢かな

有明や蟲も寝飽きて茶を立てる

蟲さも泣き言いふかこんな秋

鳴くな蟲黙つて居ても一期なり

蟀

茶立蟲
蟲雜句

鳴く蟲も節をつけたり世の中は

蟲鳴くや片足半の藁草履

蟲なくやわしらも口を持つたきて

世の中はなく蟲さへも上手下手

わやくくむしの上にも夜なべかな

古犬や蚯蚓の唄に感じ顔

出るや否みづは蟻に引かれけり

蛇の穴阿房鼠が入りにけり

さの蛇も穴なくしたか秋の暮

今蛇も穴に入るなり夫婦づれ

善陀落や蛇も御法の穴に入る

蛇も入る穴はもつぞよ鈍太郎

甘いぞよ豆粒程も柿の役

師の坊は山へ童子は柿の木へ

柿の木であいさ答へる小僧かな

柿

蛇の穴

蚯 蚓

山柿も佛の口には甘からむ
湯上りの拍に涼む熟柿かな
京の兒柿の澁さをかくしけり
澁いごこ母が喰ひけり山の柿
澁柿も鳥も知つて通りけり

栗

小布施

拾はれぬ栗の美事さ大ききよ

藥禮

大栗は猿の藥禮も見えにけり
大ききや人の拾ひし栗の毬
今の世や山の栗にも夜番小屋
流るゝに苦はなかりけり實なし栗
藪栗や夜番の小屋の俄客
跡の人三ッ栗三つ拾ひけり
あくせくも起さば殻よ栗のいが

梨

葡萄

柿

木の實

籽

圓栗

梶の葉

鼠等もまよごころするか杓子栗
落る葉もちらりくやすがれ栗
柴栗も一つはぢけて居たりけり
剩へ二子なりけりすたれ栗
いが栗も花の都へ出でたりな
初梨の天から降つた社壇かな
一番の富士見まごころや葡萄棚
我味の柘榴へ這はす風よな
夕ぐれや木の實が笠を宇都の山
千代經べき木の實を植うる女哉
籽團子疑ふらくはこれ仙家
籽の實や幾日ごころけて髓迄
圓栗のねんごころりかな
子實が蚯蚓のたるぞ梶の葉に
歌書くや梶の代りに糸瓜の葉

桐の葉

桐の葉やちらぬ一葉は虫の穴
涼しさの足らぬころへ一葉かな

紅葉

一時の雨待衆の紅葉かな
大寺の片戸ざしけり夕紅葉
一つかみ塗樽ぬぐふ紅葉かな

缺椀も同じ流や立田川

棹鹿の水沸ぬぐふ紅葉かな

神代にも沙汰せぬ草の紅葉かな

存の外俗な茶屋かり萩の鹿

棹鹿の喰ひこほしけり萩の花

鹿の子や横に喰へし萩の花

洪水の泥に一花木槿かな

うか／＼と出水に逢ひし木槿かな

草の花

入らば今ぞ草葉の陰も花に花

擬辭世

素丸遺忌七月二十日なり

葛飾や南無二十日月草の花

耳に珠數掛けて折るなり草の花

人の世や先ぐりに散る草の花

蛋放つ程は草花さきにけり

入相のきゝころなり草の花

鼠尾草や水に漬ければ風が吹く

鼠尾草

雷も焦しはせじな女郎花

何事のかぶりくゞぞ女郎花

女郎花あつけらかんと立てりけり

まぎれぬや折て立ても女郎花

松の木に少しかくれて女郎花

女郎花一夜の風に衰ふる

女郎花

雷も焦しはせじな女郎花

何事のかぶりくゞぞ女郎花

女郎花あつけらかんと立てりけり

まぎれぬや折て立ても女郎花

松の木に少しかくれて女郎花

女郎花一夜の風に衰ふる

桔梗

きりりしやんミして咲く桔梗かな

朝顔

朝顔に涼しく喰ふや一人飯

朝顔の上からさるや經山寺

朝顔や水きり町と思はれず

朝顔や一霜添うてはつと咲く

朝顔に貸して咲かせし鹿かな

朝顔や一つ咲いても風が吹く

朝顔や横たふは誰が影法師

朝顔や人の顔にはそつがある

朝顔やまだ精進の十五日

葬やうつこしければ晝も咲く

鬼灯

鬼灯や七つ位の小願禮

鬼灯を膝の小猫にさられけり

弟子尼の鬼灯植えて置きにけり

鬼灯をこつてつぶすや宵中の子

鬼灯の口つきを姉の指南かな

唐辛

人は武士君小粒でも唐辛

寒いぞよ軒の蛸唐辛

唐辛悪魔拂ふこいふ山家

居酒屋や愛想に植えし唐辛

妻を去りける時

糸瓜

糸瓜蔓きつて仕舞へばもこの水

恥かしや糸瓜は糸瓜の役に立つ

葛の花

葛の花水に引摺る嵐かな

芒

七月七日葬禮

一念佛申だけしく芒かな

世をすねる人の庇も芒かな

萩の末芒の下や喰祭

子供等も狐の眞似を芒かな

散芒寒くなるのが目にみゆる

幽霊三人の見るらん芒原

穂芒やおれが小芒もこもそよぎ

古里や近寄る人を切る芒

穂芒に下手念佛のかくれけり

向脛さうこきりたる芒かな

穂芒や細き心のさわがしき

ゆうくくミ大名竊の芒かな

花なくば尙引立たむ竊芒

祭禮の間に合ひにけり竊芒

涼しさは神代のやうの芒箸

新しき流瀧頂や蓼の花

草の實も人にこびつく夜冷かな

老の寒さが今から苦になりて

山鳥や蕎麥の白さもぞつこする

末枯や諸勸化入れる小制札

芭蕉の上手にこまる芭蕉かな

葛

嵯峨流の大念佛や葛紅葉

茸

門の葛嵯峨念佛の指南かな

茸

人を取る茸果して美しき

茸

餘所並に面並べけり馬糞茸

茸

大茸馬糞も時を得たりけり

茸

茸狩の女に勝をこられけり

茸

茸狩のから手で戻る騒ぎかな

茸

茸とり刀でわける芒かな

茸

梢から猿が教へる茸かな

茸

五六人只一つなり茸狩

茸

猿の子に酒呉れるなり茸狩

茸

小坊主に高名されし茸かな

稲

二三本涼しき足しや稲の花

稲

早稲の香や東上總の伸一里

稲

三筋程犬に負はせる稻穂かな

稻の花大の男の隠れけり

西風や島の稻も五六尺

刀根川や稻から出て稻に入る

蜻蛉も拜む手真似や稻の花

狗も腹鼓打つて稻の花

當留守の堂の小溝に稻穂かな

新米の相伴したり無縁塚

今年米我等が小菜も青みけり

旅人の垣根に挟む落穂かな

日本の外が濱まで落穂かな

菊

落穂

新米

九月十六日正風院菊會

鍛さけて神農顔や菊の花

大菊よ去年は勝つた菊ながら

菊つくり菊より白きつむりかな

縁の猫勿體顔や菊ながら

殿よりも白し上座は菊の花

山寺や糧の中なる菊の花

樂々寝て咲きにけり名なし菊

茶代こるこて並ぶなり菊の花

簾村や島の縁に茶香道

赤菊の天窓の秋や隠居連

幸にさくくさくやくざ菊

菊主や火鉢の隅の素湯土瓶

ろくくくに露ものまさず菊の花

大菊よ繩目の辱を思はずや

我やうにとつさり躰たよ菊の花

負けたこてしたこか菊を叱りけり

負け菊をひこり見直す夕かな

恥かしや勝氣のぬけぬ菊の花

一畠喰うて仕舞ひけり菊の花

江戸の末又其末の菊の花
山里や小便所さへ菊の花
山の菊曲るなどは知らぬなり
素通をさせぬしるしや菊の花
大名と肩並べけり菊の花
菊咲くや二日泊りし下々の客
小座敷や袖で拭いたる菊の酒
山菊の直なりけらし自ら
隠家や菊の中なる茶殻道
寝るつれに瓢もころり菊の花
酒臭き紙屑籠や菊の花
小ぶりなは小僧が鉢や菊の花
門に立つ菊や下戸なら通さじと
開山は芭蕉様やら菊の花
下戸庵が疵なりこんな菊の花

向きたい方へつん向いて菊の花
杖先で畫解するなり菊の花
人里に植うれば曲る野菊かな
小菊なら繩目の恥はなかるべし
横槌に尻つゝかけて菊の花
菊作り九日は菊を貰ひけり
京都は菊もかぶるや綿帽子
菊の日や呑手を雇ふ貰ひ酒
綿着せて十程若し菊の花
大菊や今度長崎からなごゝ
歌の柄に小僧の名あり菊の花
酒臭き黄昏頃や菊の花
菊園や歩行ながらの小酒盛
勝つた菊大名小路通りけり

—冬—

冬

木 枯

木枯や風に乗行く火消馬
 木枯や行拔路次の上總山
 木枯や雀も口につかはるゝ
 木枯や折助歸る寒さ橋
 今日もくゞ只木枯の菜厨かな
 身一つ嵐木枯すべり道
 木枯や諸勳化入れぬ小制札
 木枯や繩引張りし御成道
 木枯や二十四文の遊女小屋
 木枯や人なき家の兩大師
 木枯や隣さいふも越後山
 木枯にしくゞ腹の工合かな
 木枯や菰にくるんで捨庵

小 春

木枯や門の榎のあたり糺
 木枯や夫婦六部の捨念佛
 木枯や吹きくたびれし山の菰
 一人居る丈の小春や窓の前
 降る雨も小春なりけり智恩院
 十日程置いて一日小春かな
 棹雨の撞木に寝たる小春かな
 芝居や小春仕事に塗る鳥居
 くりくゞ三笠湯の鹿も小春かな
 棒先の紙もひらくゞ小春かな
 杖ほくゞ捨ひ日和の小春かな
 寒月に立つや仁王のからつ脛
 寒月の真正面なり寒山寺

霜 枯

中仙道

霜枯やおれを見かけて鐘たゞく

—冬—

—冬—

霜枯や躑の炭かく小傾城

霜枯や新吉原も小籤並

人足も霜枯時や王子道

霜枯れて確かたりくかな

霜枯や胡粉のはけし土圍子

霜枯や番屋に虱うせるなり

霜枯やさなたの顔も思案橋

人顔も霜枯るゝなり巢鴨道

街道や人の通も霜枯るゝ

霜枯や無くなりもせぬいろは茶屋

霜

春の山々

小男鹿やゑひしてなむる今朝の霜

強盗流行ければ

張番に庵こられけり夜の霜

普光寺

朝霜やしかも小供のお花賣

橋上乞食

母親を霜除にしてねた子かな

初霜やから衣かけてさす小舟

置霜に一味つけし蕪かな

空色の上は上總の霜日和

霜の夜や横町曲る迷見鉦

宿錢に奥淨瑠璃や夜の霜

小松葉の一文把や今朝の霜

霞まで生やうものか霜の鉦

家こけて霜は柱となりにつけり

一方は霜柱なり野雪隠

冬枯や在所の雨が横に降る

寒さ 人の住み古せる家を買ひて

身に添ふや前の主の寒さまで

—冬—

おのが姿に云ふ

最負目に見てさへ寒きそぶりかな

霜根六道の辻

寒空にはなれくや菩薩達

おゝ寒し寒しこいふも榮耀かな

生残り生残りたる寒さかな

極樂の道が近寄る寒さかな

しんくしん底寒し小行燈

合點して居ても寒いぞ貧しいぞ

狼は糞ばかりでも寒さかな

年嵩を羨まれたる寒さかな

椋鳥と人に言はるゝ寒さかな

寒さにも馴れて歩行や信濃山

古札の籤にちらく寒さかな

一文に一つ鉦うつ寒さかな

普化忌

次の間の灯で膳につく寒さかな

口笛も御意にかなふか初時雨

長崎

もろこしは降るかも雪の時雨口

桑石

蛤のついの烟やゆふしぐれ

善光寺御堂庭乞食

重箱の錢四五文や夕時雨

旅

しぐるゝや家にしあらば初時雨

途中にて素玩に逢ふ

しぐれこめ角から二軒目の庵

棹

鳴く鴉こんな時雨のあらんこて

悼若翁

この便聞くとてある夜一時雨

盗人おのが故郷に
かられて縛られしに

業の鳥良をめぐるや村時雨

先師追善

葛飾や拜まれ給ふ初時雨

一日の御祝儀こして時雨かな

やあしばらく蟬だまれ初時雨

嫁入の謠ひ盛りや小夜時雨

しぐるゝや親椀たゝく啞乞食

三助がたゝく木魚も時雨けり

子を負ふて川越す狙よ一時雨

くぐるゝや吠ふりく馬の首

牡丹餅の来べき空なり初時雨

目ざす敵は鶏頭よ初時雨

雀踏む程は菊もあり初時雨

時雨ねば夜も明けぬなり片山家

初時雨夕飯買に出たりけり

青柴や秤にかゝる初時雨

義仲寺へ急ぎ候初しぐれ

遠山に野火がついたぞ初時雨

夜時雨やから呼されし按躰坊

裸蟲さし出てしぐれしぐれけり

俗のつく鐘もしぐるゝ嵯峨野かな

番町やもあひ番屋の小夜時雨

七歳の順禮ぶしや夕しぐれ

人のためしぐれておはす佛かな

椋鳥の仲間に入るや夕時雨

小夜時雨鳴くは子のない鹿にがな

小座頭の追つめられし時雨かな

假初の雨も時をこ名乗りけり

おいこしや僧を目ざしてゆふしぐれ

泣くな子ら時雨空から鬼が出る

しぐるゝや真法度の小金原

壁に耳竅もものをや夕時雨

穢多村の御講職やお霜月

粥喰ふも物知らしき冬至かな

雪ちらりくゝ冬至の祝儀かな

棒突や石垣たゝく寒の入

赤坂や奴の尻に寒の入

駕脇の高股立や寒の入

はなれ家やすんくゝ別の寒の入

うしろから寒が入るなり壁の穴

門口へ来て氷るなり三井の鐘

下町や曲らんこして鐘氷る

霜月

冬至

寒の入

大寒

鐘

下冷

氷

今夜から夜が直るやら鐘訝ゆる

寝ころべば尙下冷の夜舟かな

下冷の子こ寝かわりて添乳かな

堅氷見るばかりでも祝かな

氷こも知らで渡りし湖水かな

猫の目や氷の下に狂ふ魚

夕焼や唐紅の初氷

有明の月より圓き薄氷

繩つけて子に引かせけり丸氷

美しく油の氷るこもしかな

世渡の氷柱さがるや天窓かな

片方は氷柱をたのむ屑家かな

野佛の鼻の先から氷柱かな

面白う煤のしたゝる氷柱かな

一叢はらり江戸氣の霰かな

霜

氷柱

一散に飛んで火に入る霰かな
霰ちれ霰ちれ孫の福耳に
盛任がしやつつらたく霰かな
玉霰山の小雀も連て来る

雪

草庵

雪の戸や押せば開く寝て言ふ

十二月二十四日故郷に入る

是がまあ終の栖か雪五尺

病中のでいたらく

枉なりに吹込む雪や枕許

初雪を着て戻りけり秘藏猫

初雪や俵の上の小行燈

初雪を煮て食ひけり奥の院

初雪や今行く里の見えて降る

初雪をいまくしいさいふべかな

初雪やをしかけ客の夜番小屋
初雪や縁から落ちし上草履
初雪や鳥もかまはぬ女郎花
初雪や故里見ゆる壁の穴
初雪やあしたの原のふきこまり
初雪のふり捨てゝある家尻かな
初雪や門の栗塚大根塚
子供等が雪喰ひながら湯治哉
雪散るやおさけも言へぬ信濃山
男なき寺や立派に雪を掃く
雪散るやきのふは見ぬ貸家札
役馬の重荷に雪の小付かな
来る人が道つけるなり門の雪
雪國の雪祝ふ日や淺黄空
むまさうな雪がふうはりくみ

初雪やこきつかはるゝ立佛
雪ちるや脇から見たら榮耀駕
ほちやくゝ雪にくるまる在所かな
犬共が除けてくれけり雪の道
雪菰やなけこんでゆく扇狀
降る雪や湧き捨てゝある湯の烟
山里や風呂に埋めたる門の雪
明日はなき月の名所を夜の雪
橋の下の乞食がいふや乞食雪
風陰に雪の積むなり裏畑
窓の雪積んでこそゝ博奕かな
松の奥又其奥雪や手洗
曲者ゝ人なまがめそ笠の雪
眞直に小便穴や門の雪
道漚の御覽の雪や三の丸
旅人や人に見らるゝ笠の雪

雪丸こなりおうすれば捨るなり
雪ふれや貧乏徳利こけぬ中
鼻先の掃溜塚もけさの雪
雪散りて人の大門通りけり
窓の穴壁の割れより吹雪かな
我家はまるめた雪のうしろかな
菱なりに雪がふき入る疊かな
里の子や手でつくねたる雪の山
垂むしろを天窓でわけら吹雪かな
重荷負ふ手や歌につもる雪
里の子や雪待ちかねし杵角力
頼んでもおれにもうたす雪磔
彼是こいふも當宿ぞ雪佛
藁菴の豆腐かつぎて枯野かな
雉子立つて人驚かす枯野かな

六道の辻に立ちけり枯野原

五六疋馬ほして置く枯野かな

西方の極樂道よ枯野原

お取越

お取越飴で餅喰ふ嘶かな

十

手序に煙管磨くやお取越

十

爐開やあつらへ通り夜の雨

十

籤守の人氣も見ぬ十夜かな

十

菜晶を通して呉れる十夜かな

十

菜晶を横筋かひの十夜道

十

御十夜は巾着切も月夜かな

十

もろくの愚者も月夜の十夜かな

十

寒垢離に背中の龍の披露かな

十

手足まで寒晒なる下部かな

十

寒聲や乞食小夜より女の子

十

風の子や裸で逃る寒の炙

寒行

木母寺や常念佛も寒の聲

寒

寒聲ミいふも南無阿彌陀佛かな

寒

寒聲ミ名乗りかけり常念佛

寒

寒聲につかれ給ふ念佛かな

寒

そつくりミ大津の鬼や寒念佛

寒

つんほ札首にかけつゝ寒念佛

寒

何果か腰のかゝんだ寒念佛

寒

一夜さは出来心なり寒念佛

寒

都なり寒念佛に供つれる

寒

寒念佛さては貴殿でありしよな

寒

雨の夜やしかも女の寒念佛

寒

其あこは新寒念佛ミ見えにけり

寒

出始を祝うて敲く瓢かな

寒

つき合や不性々々に寒念佛

寒

殊勝さは同じ瓢の敲きやう

垢つかぬ中が殊勝の寒念佛
着ふくれて新寒念佛の通りけり

冬籠

小人閑居爲不善

冬籠惡物喰のつりけり

嵯峨山

早々誰冬籠る細煙

大刀疵を一つばなしや冬籠

眠りやう鷺に習はむ冬籠

西の木と聞いてたのむや冬籠

冬籠其夜にきくや山の雨

能なしは罪も又なし冬籠

人識る會が立つなり冬籠

おれにつぐ能なし猿や冬籠

柿の木に又罪つくる冬籠

辻君に並びが岡や冬籠

さし捨し柳の蔭を冬籠

江戸も江戸ノ真中の冬籠

夷講

大黒も連に座るや夷講

杉簀で火をはさみたり夷講

神々の留守洗濯や今日も雨

我宿の貧乏神もお供せよ

大黒の俵つくりて神むかへ

鷲ひよろく神のお立けな

初時雨鈴ふりにけり今日は

十月の御十日ぞ初時雨

俳諧の報恩講や初時雨

芭蕉忌に丸い天窓の披露かな

芭蕉忌や晝から錠のあく庵

芭蕉忌やエゾにも之な松の月

法華經も鳥も芭蕉の法事かな

芭蕉忌やことしもまめで旅風
御寶前にかけ奉る初時雨
徳利を葛につるすや網代守

網代守

網代守こゝにとえへん／＼かな
網代守年に不足はなかりけり
三日月ミ膝を並べて網代守
網代守天窓で樹をとりにつけり

薬

行人を皿で招くや薬喰

麦

一握の麥を蒔くぞよ門雀

納豆

納豆ミ同じ枕に寝る夜かな

炭

炭の火や朝の祝儀の咳拂

まつ時は犬も來ぬぞよおこり炭
老僧が炭の折れたを手柄かな
普陀落や岸うつ波をおこり炭
分けてやる隣もあれなおこり炭

炭竈
炭竈の空の小隅も憂世かな
炭竈や暫し里ある並びやう

埋火

埋火に柱の鷓聞えけり

櫓の火

櫓の火や目出度御代の顔と顔
櫓の火にうしろ向けり最明寺
子寶がきやら／＼笑ふ櫓火かな
若役に窓あけに立つ炬燵かな

炬燵

炬燵から大名見るや木通

湯に入ると炬燵に入るが仕事かな

つぶぬれの大名を見る炬燵かな

唐までも鶴呑顔して炬燵かな

大火鉢またきながらや茶碗酒

酒五文つがせてまたぐ火鉢かな

南天と並びが岡の火桶かな

御目覺の前や火桶に朝茶碗

貧乏うしといひひく火桶抱きにけり

蒲團

大阪八軒家

船がついて候とはぐ蒲團かな

ぶくくゝミ衾の中の小言かな

早立がかぶせてくれし蒲團かな

今少し雁をきくこて蒲團かな

祐成が蒲團引はぐ笑かな

紙衣

小布團や猫にもたるゝ足の裏

飯櫃に巻かせれば蒲團なかりけり

百敷の都は猫も蒲團かな

焼穴の日にくゝふえる紙衣かな

つまきせの美をつくしたる紙衣かな

めでらるゝとも所詮紙衣かな

菊かつぐうしろ見よとの紙衣かな

古反古綴り合せて羽折かな

爰からは都か紙衣着る女

紙衣似合ふといはれしも昔なり

明神の御祖ミ遊ぶ紙子かな

負けぬ氣も紙衣似合ふミ言はれけり

唐土の吉野へいざと紙子かな

芭蕉塚先づ拜むなり初紙衣

加茂の水吉野紙衣と答へけり

橘

棧や凡人わざと橋を引く

そり引や屋根から呼る屈狀

かんじき

かんじきや庵の前を踏み序

かんじきや子等に習うてはきにけり

かんじきや人の眞似して犬泳ぐ

神樂

山本や小彌宜一人の早神樂

壺は又どの月夜の里神樂

吹草祭

里並に鉦の鍛冶屋も祭かな

年の暮

念々相續

彌陀佛の土産に年を拾ふかな

加茂川を渡らずとちかひし

人もあるに一度高籠りし深

山を下りて白契のつむりを

ふかれつゝ名利の地に交る

恥かしや又も出てとる江戸の年

小兒川の里はと心がけしが

人を殺しばくちをうち追割

すなど風聞みな此邊りなれ

ば小南行は思ひとまりて布

施の里に年をとりぬ

ゆく年やたのむ小籤も枯野原

寒空やどこで年とる旅乞食

念佛の外をやるなり年の暮

山本や師走日向のこほれ村

君が代や唐人も來て年籠

傾城の山かつらせり年の暮

年とるは大名こても旅宿かな

何のその首はぬくまい年の暮

としよりの宛もないぞよ旅鳥

待つものは更になけれさ年の暮

憂旅も炬燵で年をとりにけり

叱らるゝ人羨まし年の暮

ゆく年や空の青さに守谷まで

梟よのほほんどころか年の暮
大年や二番寝過の人通り

ともかくもあなたまかせのとしの暮
一袋猫もごまめの年用意

直き世や雀は竹に年用意
湯に入りて我身となるやこしのくれ

影法師も祝へ只今年暮るゝ

大晦日

商一錢者日有樂

笛吹いて大晦日を鮎の鳥

先づよしと大つもごりの寢酒かな

りんうつや年の仕舞の穴かしこ

霞むぞや大晦日の寛永寺

煤掃

隠家や松の天窓の夜も掃く

都鳥それにも煤を浴びせけり

夕月や御煤の過し善光寺

煤掃の世話もなき身を泪かな

庵の煤風が拂つて呉れにけり

長閑さや煤はいた夜の小行燈

山里や四五年ぶりの煤拂

煤竹へころ／＼猫のざれにけり

煤はいた形で出歩く小野郎かな

猫つれて松へ同居や煤拂

煤拂も悪日などの六かしや

煤竹や藪の社も一社

せき候

せき候や小錢も羽が生えて飛ぶ

子の眞似を親もするなりせき候

引風やせきから直にせつき候

町中やよい年をしてせつき候

大籤の人もせき候せき候よ

せき候や七尺去つて小せき候

—冬—

せき候やさゝらで撫る梅の花

下京や夜は素人のせつき候

せき候にまけぬや門の村雀

せき候やはるゝかへる寺の門

頭から湯煙立て、せつき候

あかぎれをかくして母の夜伽かな

あかぎれ
衣配

山寺の忘れかたみに衣配

又の世は人に配らん贖衣

君が代や厩の馬へも衣配

年の市

年市の雪

雪散るや錢はかりこむ大吠

山里や簾の中にも年の市

皮羽織店に出るなり年の市

掛取が土足踏むごむ圍爐裡かな

掛取
古曆

善悪も亦一日や古曆

札納

三吉野や櫻の下に札納

梅の木や御祓箱を負ひながら

我とこへ來たのではなし餅の音

はね餅の十三入りけり犬の口

我門へ來さうにしたり配り餅

餅春や今それがしも故郷入

神の燈や餅を定木に餅をきる

餅搗が隣へ來たといふ子かな

妹が子は餅負ふ程になりにけり

かくれ家や猫が三疋餅の番

お袋がお福手ちぎる指南かな

母人が丸めて投げる手本餅

門並や只一白も餅の札

神の餅秤にかける浮世かな

犬の餅鳥が餅も搗かれけり

—冬—

のし餅や穀手のあまのありくゞミ
山本や狐の穴も配り餅

ぶつつけて餅に書くなり何貫目

あてにした餅が二所はづれけり

草の戸も逃がしはせぬや餅の札

お仲間に猫も座こるや年忘

わんと言へさあ言へ犬も年忘

老松を相手に年を忘れけり

都かな橋の下にも年忘

家なしや今夜も人の年忘

人立や庵もさらばや年忘

嵯峨山や十こ許り年忘

いくつやら覺ぬぬ上に年忘

我庵やたつた一人も年忘

我家の小供も鬼を追ひにけり

節分

鰻

鬼よけよ浪人除けよさし終

一聲でこの世の鬼は逃るよな

門にさして拜まるゝなり赤鯛

隠家や齒のない聲で福は内

三つさへかりくゞや年の豆

鬼の出たあま掃き出して安座かな

福豆や福梅干や齒に合はぬ

其あとは子供の聲や鬼はらひ

豆蒔や鼠の分も一つかみ

五十にて鰻の味を知る夜かな

肩越に馬ののぞくや鰻汁

鰻汁やもやひ世帯の惣躰

鰻喰はぬ奴には見せな不二の山

虎鰻の顔をつん出す蔭かな

冬の蠅

北國は十分の世ぞ冬の蠅

鷓鴣 馬光塚

あら淋し塚はいつもの鷓鴣

鷓鴣きよろ／＼何ぞ落したか

今しがた来たよ小癩な鷓鴣

三十三才 こつそりこして稼ぐなり三十三才

三十三才ちゝといふても日が暮れる

子 鶯 鶯や黄色な聲で親を呼ぶ

寒 雀 脇へ行くな鬼が見るぞよ寒雀

浮寝鳥 御成場

江戸川や人除させて浮寝鳥

大三十日頓着もなし浮寝鳥

汝等も福は待つかよ浮寝鳥

我家を風除にして浮寝鳥

蘆鴨やお成と知らで安晴顔

落つきにちつミ寝て見る小鴨かな

鴨

千 鳥

御地藏と日向ほこして鳴く千鳥

三絃に鳴きつく計り千鳥かな

關守が吐つて曰く馬鹿千鳥

村千鳥そつと申せばばつミ立つ

象潟の缺をつかんで鳴く千鳥

行ミして何をいちむち夕千鳥

歸り花 可愛さよ川原撫子かへり花

木瓜の株苳つくされてかへり花

山木瓜や實をこりまいて歸り花

水 仙 水仙や垣に結びこむ筑波山

水仙や大仕合のきり／＼す

水仙女やきれなき御庵

枇杷花 嵯峨村と名乗顔なり枇杷の花

大 根 信濃ぶり

我門や只六本の大根藏

野大根大髭殿に引かれけり
大根ひく柏子にころり小僧かな
鳴雀其大根も今引くぞ

野大根引捨てられもせざりけり
雉も、粗鳴きにけり大根引
大根引大根で道を教へけり
鶴遊べ葛飾大根今や引く

干菜 留守事や庵のぐるりも釣干菜
葱 雪國や土間の小隅の葱島

枯芒 立砂翁十三回忌
何こして忘れませうぞ枯芒
枯芒昔鬼婆のあつたこさ
花銅委地無人歌

思ひ草思はぬ草も枯れにけり
女郎花何の因果で枯れかぬる

枯草

枯菊 作らるゝ菊から先に枯れにけり
冬木立 立樹叟十三回忌

冬木立昔々の音すなり
成蹊子去年の冬つひに不言
人となりしとなむ鶯笠のも
とよりこの頃申おこせたりしを
つこの國の何を申すも枯木立

亡師若翁の墓に詣で、
夕暮に土を語るや散る木の葉
今うちし鳥のさまなり散木葉
門先にちよいと渦く木の葉かな
落葉して三月頃の垣根かな
落葉して日向に酔ひし小僧かな
落葉して佛法流布の在所かな
楢の葉の朝から散るや豆腐桶
鶯の口すぎに来る木の葉かな

大正十五年八月十五日印刷
大正十五年八月二十日發行

【定價一圓二十錢】

編輯者 俳禪舍主人

發行者 吉田 文治

京都市上京區田中門前町一六

印刷者 西川 大呂

京都市下京區坊城通五條下九



發行所 京都市田中門前町一六 **更生閣**

振替大阪六九〇八三番

發賣所 京都市四條大宮東入 **洛東書院**

振替大阪六三三二七番

~~550~~ 911.34
~~87~~ H15

終

